

クリティカル・シンカーを育てたい

佐古 孝義

はじめに、問題から

唐突で申し訳ないが、手始めに以下の文章を読んで、理解できた度合いを10点満点で評価していただきたい。(全く理解できなかつた：0点～完全に理解した：10点)

「やり方はとても簡単だ。まず同じ性質になるように、いくつかのまとまりに分けなさい。いっぺんにたくさんやろうとせずに分けてやったほうがよい。それは大事なことだとは思わないかもしれないが、全部一緒にやろうとすると、うまくいかないことがあるのだ。

次に機械のところに行く。手近なところにそれがないために、外に出かける人もいだろう。機械を適切に操作するためには、手順と操作方法がわかっていなければならない。

必要なものをすべて入れることを忘れるな。

終わったら、すべてのものを分け直しなさい。使いやすいように仕分けするのだ。

あとはこのサイクル全体の繰り返しだ。

初めのころはやるべきことの多さにうんざりするかもしれない。

だが、それはすぐに生活の一部になる。」¹⁾

おそらくこの文章を一読した段階で、理解度に関して高い点数をつけた人は少なかったのではないかと思われる。いったい何の話をしているんだ?と。ただし、これがひとたび「洗濯」に関する文章だという情報が与えられれば、理解度は一変するはずである。

これは、クリティカル・シンキング(Critical Thinking 以下、CT と略す)の原則のひとつ、論題を明確化するための「スキーマの活性化」を如実に示す一例である。上掲の問題のとおり、われわれは、暗黙の前提に胡坐をかいたまま、対象を特定せずに

議論を始めてしまっていることが実に多い。後に詳しく論じるが、CTはこうした無自覚的姿勢への反省を促す点で、日常生活の様々な場面で有効である。

そこでわれわれもCT原則に倣い、議論の対象を明確化することから始めてみたい。すなわちCTとはいったい何なのか?

1. なぜ、今クリティカル・シンキング(CT)なのか?

「クリティカル・シンキング」という言葉が巷間を賑わせるようになって久しい。近年では、「グローバル(人材育成)教育」などという正体不明の教育目標の中であって、CTはひとつのbuzzwordとなりつつある。過剰なまでの情報の洪水によって、混沌と不透明感が増しているこの社会をタフに生き抜くスキルとしてCTが称揚されているのは、至極当然のことだと言える。実際、2012年6月4日に文部科学大臣名義で提唱された「社会の期待に応える教育改革の推進」²⁾においても、「批判的思考」を重視した改革が明記されている。しかしここで立ち止まって考察しておかねばならないことは、CTという言葉でいったい何が名指されているか、という定義であろう。それを一種のビジネススキルのように捉えるものから、心理学をベースとするもの、また哲学(より狭義には形式論理学など)を土台とするものまで、その語の指す概念は多岐にわたっている。伊勢田哲治は、CTを「修理型」と「改築型」の2つに大別し、哲学的CTは主に後者を扱うものであると整理している³⁾。

そこでわれわれとしては、教育(とりわけ英語教育)の場面で、どのようなCTを取り扱うのか。その定義とは以下のようなものとなる。

2. CTとは、何を指すものなのか?

本稿では、CTを「①早まることなく、②細部に

も関わって、③複数の視点で、吟味し、問い、よく考える」知的な営みを指すもの⁴⁾と(暫定的に)定義したい。それは通常 CT という語から連想されるような、論理の糸を直線的に最短距離で辿るクリアカットなイメージというよりはむしろ、1つの論件を巡って考えうる限り様々な側面からよく吟味する(ある意味で迂遠な)複層的な協働作業であることを強調しておきたい。

もう少し踏み込んで説明しよう。

①早まることなく

：「質問があります」「まだよくわかっていません」「考え直しているので時間を下さい」「このテーマでもう一度書き直したい」などといった〈呼び止め〉や〈判断留保〉を躊躇わずに行うことが出来ること。

②細部にも関わって

：「細かいことかもしれないけれど」「気になることがあるので」まだ議論したい、というときに、途中で切り上げずに時間をかけること。

③複数の視点で

：「この視点では正しいと思えても、別な視点からの考察や吟味をしてみたい」なら「誰か偉い人の意見だからといって、すぐに従わなくていい」と言えること。

こうしたある意味で手間のかかる営みを億劫がらず行ってゆくことを CT は求めている。そこでは、個々のスキルというよりはむしろ、CT の営みを共有する場の「環境」が大事である。この場を共に作る人たちは、自分や他の参加者が「本気で」問いを発し、問いに関わることに好意的である(べき／はずな)のだ。この意味で、授業者はスキルの教授者ではなく、環境を整備するファシリテーターでなければならない。

2-1. 「開く」思考と「絞る」思考

さて、その環境整備において、注意しておかなければならない思考の方向性が2つある。ひとつは、これまでの常識や、今手持ちの信念に必ずしもとらわれず、心をオープンに、「開いて」考え、語ること。もうひとつは、いろいろな思い付きやアイデアの断片が散在している状況で、選択肢や観点が錯綜し、却って決められなくなっている状況で、根拠を

持って「絞って」考える訓練をすること、である。この「開く」思考と「絞る」思考を同時に／往復して深めてゆくことが、CT に最も特徴的な点だと言える。

筆者はとりわけ後者の「絞る」思考に関して、授業では注意を払う必要があると考えている。児童・生徒と教室内で哲学的対話を試みる実践において(たとえば p4c などの実践⁵⁾を参照されたい)は、彼らの自由な発話を出来る限り尊重する立場から、議論が拡散すること、連想に従って当初のテーマから脱線してゆくことを妨げず、むしろ積極的に評価する傾向がある。まさしく「開く」思考の典型と言える。また「開く」思考については、学校外でも既にこれまで様々な場面で(特に多くの「哲学カフェ」などの市民参加型ワークショップで)実践の蓄積がある。このように、オープンエンドで、自由連想のもと、参加者が思ってもみなかったような方向に議論が進んでいくことは、ある種の知的高揚感を味わう経験であり、思考対話の醍醐味である。

しかしここで、あくまで CT を取り扱う授業においては、後者の「絞る」思考の持つ重要性を指摘したい。それは、CT が「課題解決 Problem-Solving」を目指す思考として有効だと考えるからである。CT とは、批評家(critic)が課題の外部から事象を批判するだけの岡目八目的な姿勢を指すものではない。CT が目指すのは、容易に答えの見つからない難題に直面する当事者(たち)が、対話を通じてより妥当(だと思えるよう)な解答に可能な限り近づくため、自らの思考を根拠を持って「絞って」ゆくことである。そのスキルこそ、グローバル人材に必要な資質(というものがあれば)として生徒諸君にぜひとも体得してもらいたいものだ。と筆者は確信している。

2-2. Argument に注目する CT

筆者は授業の中で、そのような「開く」思考と「絞る」思考の実践の基礎段階として、特に Argument に注目する CT を中心に据えたいと考えている。説明の便宜のために、厳密さを犠牲にそれを簡単に図式化すると

Argument 【議論】

= Claim 【主張】 + Support 【根拠】

ということになる。さらに

Support 【根拠】

= Reasoning 【論証】 + Evidence 【証拠】
と細分化することも出来る。

Argument を分析するとき、まずそれは何の問いに答えた Claim なのかを特定することが大事である。次に、Support に関係なくその Claim が気に入らないのか、それとも Support がない(あるいは薄弱である)ことや、Support が Claim を正しく支えていないと思えるので納得がゆかないのか、それらも意識しつつ、言論を整理して考える。この一連の CT の手続きで、ある【問い】に対する【主張】と【根拠】の1セットが明確になるのだ。

ではなぜ Argument に注目する CT なのか。それは CT の有効性とも関わる。CT が有効なのは、何も学術論文や科学的データの検証といった場面だけではない。曖昧さや予断、偏見に満ちた日常生活の中であってこそ、CT によって、「いったい今何の問いに対して、いかなる主張がされているのか。またその根拠は何か」を明確にすることは一層重要なことだからである。筆者は、英語(語学)の授業を通じ、Argument を特定する基礎的な眼を養うことが可能であり、また当為でもあると考えている。

3. 英語の授業でどのようにクリティカル・シンカーを育てるのか？

3-1. クリティカルに読むこと

ここで、CT による授業の1つの可能性を示す具体的実践例を紹介したい。勤務校の2年生で扱っている『改訂版 入試長文読解シリーズ① Take Up English Reading』(数研出版)Unit 18 を例として取り上げよう。この課では、スピーチのはじめ方に対する日米の差異に端的に見られる文化的背景を比較する視点が紹介されている。中でも授業者を悩ませたのは、polite fiction という術語をどう生徒たちの理解の中に落とし込むか、ということであった。具体的に本文では

〔第4段落〕 Perhaps the most interesting thing about these contrasting approaches to speech making is the light they cast on how extremely hard it is for anyone to break out of his/her own particular polite fiction.

がそれにあたる。生徒たちは、手元の辞書にある訳

語「社交辞令」を当てはめて読解しようとする(見出し語として載っていない辞書もある)が、当然ながらしっくりこない。さて、どうしたものか。

CT によるリーディングの授業はここから始まる。すなわち、まずはキーワードとなる【問い】「polite fiction とはいったい何なのか?」を特定すること、それに対する Claim 【主張】と Support 【根拠】の1セットを明確にすることを生徒たちとともに複数の視点で考えてゆくことになるのだ。ここで大事なものは、【問い】の答えとなる【主張】を【根拠】との1セットで考えることを求めることだ。

【根拠】の素になるのは Evidence 【証拠】である。本文中から polite fiction が用いられている箇所を【証拠】として列挙し、そこから Reasoning 【論証】を行う。

〔第1段落〕 ... since the Japanese polite fiction is that "you are my superior" and therefore that "I am in awe of you," ...

〔第5段落〕 If we recognize how often we can't stop acting out our own polite fictions even when we know they are inappropriate, we should find it easier to sympathize with people of other cultural backgrounds and polite fictions when they can't stop acting out theirs.

この箇所から、polite fiction とは単なる「社交辞令」(のみ)を指すのではなく、「それぞれの文化的背景 cultural background に根差した建前 fiction」のことを意味するのだという Argument が論証される。その理解に従って本文を略解すると

- ・ Japanese polite fiction = you are my superior / I am in awe of you → apology
- ・ American polite fiction = we are friends and equals → joke

となる(問題を解くということに関して言えばここまでで必要十分である)。…しかし、こんな単純な理解でよいのか。CT によるリーディングとは、再びここで【問い】に立ち戻ることを意味する。つまり「polite fiction とはいったい何なのか?」ともう一度問いかけることである。

投げかけられた【問い】に対して、生徒たちは自分たちの【主張】を展開するために、それを支える【根拠】となる【証拠】を集めなければならない(そ

の多くはインターネットを通じて⁶⁾、ということになるが、中には1年生で扱った教科書にあった、日米における社会的行動について書かれた文章を参照する生徒もいた)。こうして、今1つの読解教材から得た手持ちの知識に固執することなく、オープンに「開いて」思考し直すのである。

3-2. クリティカルに問うこと

そうしていくつかの生徒の Argument を紹介し、議論が拡散してきたところで、1つのテキストを取り上げる。

The most surprising cultural difference I experienced might have been when I ordered green tea with sugar at a restaurant in Kyoto. After a pause, the waiter politely explained that one does not drink tea with sugar. I responded that yes, I was aware of this custom, but I liked my tea sweet. My request was met with an even more courteous version of the same explanation: One does not drink green tea with sugar. While I understood, I told him, that the Japanese do not put sugar in *their* green tea, I would still like to put some in *my* green tea. Thus thwarted, the waiter took up the issue with the manager, and the two of them began a lengthy conversation. Finally, the manager came over to me and said, “_____.”⁷⁾

結論部分は空欄にしておき、生徒たちにどんな台詞が入るかを考えてもらう。無論そのとき、どうして自分はその答え(=【主張】)に辿り着いたのか【根拠】を伴った形で答えてもらうのだ。授業者として留意しているのは、正解／不正解を判断することではなく、【主張】と【根拠】の1セットにどれほどの一貫性があるかという点を評価することである。

ひとりの生徒は、あるサイトからの次の記述を引用して、「店長は砂糖を持ってくる」と結論した。(In America,) politeness means giving the other person a choice, recognizing their individual preferences. Take coffee, for example. You have a choice of whether you want it or not, whether you want one lump or two, milk or no milk, etc. It would be

considered rude if a host just gave you a cup of coffee without asking how you liked it.

In contrast, in East Asian countries, the highest status person often orders for the whole group. The polite fiction is “We are all part of the same group” and therefore eating the same food, or as humble host: “As honored guest, I give you the best I have to offer even though it isn't very good.”⁸⁾

議論を「絞る」ために、先のテキストの続きを提示して、再び空欄について考えてもらう。

Since I couldn't have the green tea as I liked it, I changed my order to a cup of coffee, which the waiter soon brought over. Resting on the saucer were two packets of sugar.⁹⁾

さて、読者の皆さんも【答え】がお分かりになっただろうか。そして、その答えの【根拠】を明示的に述べる事が出来るだろうか。

註

- 1)『クリティカルシンキング実践篇』(ゼックミスタ他, 北大路書房 pp. 17-18)
- 2) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/_icsFiles/afiedfile/2012/06/28/1322862_1.pdf
- 3)『哲学思考トレーニング』(伊勢田哲治, ちくま新書)
- 4)この定義については、筆者も参加する「探Q複数の視点で考えるカフェ」でガイドを務める菊地建至先生のご指示に従っている。「(クリティカルシンキング入門は、何をすることなのか(1))」菊地建至, 『金沢医科大学教養論文集 Vol.43』pp. 29-49)
- 5)p4cについては下記サイトを参照 <http://p4c-japan.com/>
- 6)授業はネット環境が整備されたCALL教室で行った。
- 7) *The Art of Choosing* (Sheena Iyengar, Twelve p. 29) 一部改変
- 8) <http://www.culture-at-work.com/politefiction.html> 下線強調は引用者
- 9) *The Art of Choosing* p. 30 下線強調は引用者